

## 障害児を対象としたスポーツクラブの提案 —“わくわくアダプテッド・スポーツクラブ”の事例—

曾根裕二<sup>1)</sup>・植木章三<sup>1)</sup>・金子勝司<sup>1)</sup>・竹内亮<sup>1)</sup>・安田友紀<sup>2)</sup>・  
陳洋明<sup>1)</sup>・後上鐵夫<sup>1)</sup>

### The proposal of a sport club planned for children with disabilities —The case of a “WAKUWAKU-Adapted Sport Club”—

Yuji Sone, Shouzoh Ueki, Shoji Kaneko, Ryo Takeuchi, Yuki Yasuda,  
Yomei Chin, Tetsuo Gokami

キーワード：アダプテッド・スポーツ、障害児、スポーツクラブ

#### 1. 緒言

2011年に制定されたスポーツ基本法の前文には、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であることが明記されており、性や年齢、障害の有無によらない、誰もがスポーツを楽しむ sports for everyoneが強調されている。しかし、笹川スポーツ財団の調査<sup>1)</sup>によると、過去一年間にスポーツやレクリエーションを行った知的障害者は五割程度と報告されており、sports for everyoneの状況には至っていないようである。更に、総合型地域スポーツクラブを対象とした奥田<sup>2)</sup>の研究によると、クラブへの障害者

の受け入れの現状は、クラブ側が積極的に受け入れ体制を整えると言うよりは、既存の事業に障害者の参加意向があった際に必要な配慮を行っていくという傾向が見られたことを報告しており、結果的にクラブ側の配慮が必要ない軽度障害者の参加が多くなっていることを指摘している。つまり、障害者が地域のスポーツクラブに参加しようとしても、障害者の程度によっては参加の機会がより限定的になっている現状がうかがえる。

また、総合型地域スポーツクラブに障害者を受け入れるためには、障害者スポーツ指導者の確保が必要であるとする報告<sup>2)</sup>や、実際に障害者の参加があるクラブでは、クラブ立

大阪体育大学教育学部  
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

1) 大阪体育大学教育学部 2) 大阪体育大学健康福祉学部

ち上げの際に障害に対する理解のあるスタッフが存在していたことが共通項として挙げられるとする事例報告<sup>3)</sup>もあり、障害者のスポーツ参加の機会を保障するためには障害や障害者スポーツの専門家の存在が、促進要因であることが示唆されている。

大阪体育大学教育学部は保健体育教育コース、小学校教育コースのいずれのコースでも必要な単位を修得すれば特別支援学校教員免許の取得が可能であり、障害児を含めた、様々な支援の必要な児童、生徒への教育実践に興味を持つ学生も少なからず在籍している。また、健康福祉学部においても特別支援学校教員免許の取得が可能であり、中でもスポーツ福祉系では、年齢や性別、障害の有無に関わらず全ての人に対するスポーツ実践を学んでいる。更に両学部には特別支援教育を専門とする教員、障がい者スポーツ指導員資格を有する教員、障害児への運動、スポーツ指導を実践している教員も所属している。これらのことを踏まえ、前述した障害者のスポーツ参加を促進するための要因の一つは満たしていると捉え、大学の地域貢献、学生や教員の実践、研究の場の確保という観点からも、大学が主体となって障害者のスポーツ活動の場を提供することは有意義な活動であると考えた。

本研究では、平成28年度より試行的に創設された障害児を対象とした運動教室「わくわくアダプテッド・スポーツクラブ（以下、わくわくAdsクラブ）」の活動を事例として、そ

の実施状況を考察し、課題を整理することによって、今後の障害児を対象としたスポーツクラブ運営の方向性について検討した。

## 2. わくわくAdsクラブについて

わくわくAdsクラブは、大阪体育大学の「平成28～32年度 特色あるプロジェクト計画」の研究事業「特別支援学校生徒のアダプテッド・スポーツ実践の場の提供とその効果」の一環として創設された障害児を対象としたスポーツクラブである。初年度である平成28年度は、大学の近隣にある特別支援学校一校（知的障害）のみを対象とした。事前に対象校の管理職を交えて打ち合わせを行い、中学部ならびに高等部の生徒を対象とし、月に二回程度を目安に実施することとした。開催日は土曜日とし、10時から11時半の90分を活動時間とした。活動場所は大阪体育大学第六体育館の三階アリーナである。

対象校の夏季休業が始まる前に案内文書、ならびに申込用紙を各家庭に配布し、参加希望者はわくわくAdsクラブ窓口へメールで連絡することとした。申込用紙に記載したわくわくAdsクラブの目的、および活動内容は「アダプテッド・スポーツクラブは、支援学校に在籍する中学部、高等部の生徒に対して、スポーツ活動の機会を提供し、大学教員や学生との交流を通じて、技能や体力の向上だけでなく、QOL（生活の質）の向上、生涯スポー

ツの獲得をめざします。正式なルールに則ったスポーツと言うよりも、参加者の実態に応じて既存のスポーツを工夫したり、新しいスポーツを創造したりします。」であった。

また、初回参加時に活動の目的や意義について詳しく説明した。説明内容を理解し、参加に同意する場合は保護者から同意書を提出することとした。なお、教室への参加を同意しても、欠席することは自由であり、途中で参加を取りやめても何ら不利益のないことを説明し、得られた個人情報については、厳格に管理されること、また教室での活動内容等を公表する場合には個人が特定されない形で行うことなどを十分に説明した。

## 2-1. 参加者について

わくわくAdsクラブの参加者は、原則として特別支援学校（知的障害）の中学部、高等部に在籍する者とした。2016年12月末現在での参加者は12名である。参加者の性別、学年

などの概要について表1に示す。また、健康面や運動を実施するにあたって配慮すべき点としては、大きな音が苦手、首が弱いのでマット運動などは医者に止められている、体がかたい、筋力が弱い、初めてのことは時間がかかる等が挙げられた。

尚、大阪体育大学学生の協力スタッフとして登録した人数は2016年12月末現在で20名であり、毎回の実践には、10名前後が参加している。

第1回、第2回の実践時に参加者の生活習慣および学校以外での運動習慣について、簡単なアンケート調査を実施した。回答の得られた9名の就寝時刻は21時から23時の間であり、睡眠時間は8～10時間の範囲であった。また、朝食摂取の有無に関しては、全員が毎日食べているという結果であった。

学校以外での運動やスポーツを行う機会に関する質問では、4名が学校以外で運動やス

表1 わくわくAdsクラブ参加者の概要

	小学生	中1	中2	中3	高1	高2	高3	卒業生	計
男子	1名	2名	4名	0名	0名	2名	0名	0名	9名
女子	0名	1名	0名	1名	0名	0名	0名	1名	3名
小学生と卒業生については、参加者の兄弟、参加者からの紹介により、参加を希望した者である。									
療育手帳※	A:6名、B1:0名、B2:4名、不明:1名 身体障害者手帳保有:1名								
当初の希望	ボールを使いたい、体を動かしたい、障害者でもできるスポーツをさせたい、大きいボールを使いたい、マット、ダンス、運動不足なので体を動かせれば何でもよい、運動する楽しさを知ってほしい、リレー、競争やボールを使った運動、水泳、やったことない運動、チャンバラ、等								

※療育手帳とは知的障害者に都道府県や政令指定都市が発行する障害者手帳であり、様々な福祉サービスを受けるときに必要となる。その判定については各自治体がそれぞれの基準に基づいて、知能検査と日常生活の様子などから、知的な障害の程度を総合的に判断し、決定する。大阪府においては重度、中度、軽度に区分され、それぞれA、B1、B2と表記される。

スポーツをやる機会があると回答しており、そのうち1名が学外のスポーツクラブに参加しているとのことであった。また、定期的か不定期かに関わらず、学校以外での運動時間は回答した全ての参加者が一回につき30分未満という状況であった。

## 2-2. 活動について

活動の際には原則として参加者と学生スタッフが一對一でペアを組み、参加者の実態に  
応じて行うよう心掛けた。活動は全体で行うウォーミングアップ、個別の活動、全員での

集団競技の三つのパートに分かれており、2016年12月末までにプレ教室と6回の教室を行った。本稿では、その7回分の実践について整理、検討した。

主な活動の流れを表2に、2016年12月末までの実施回ごとの参加人数と活動内容を表3に示す。また、活動の様子について図1、図2、図3に示す。

## 2-3. 体力測定

第1回ならびに第2回の実践において、体力測定を行った。測定を実施したのは7名(男

表2. 主な活動の流れ

ウォーミングアップ (20分～30分)	準備体操 動きづくり(ランニング、サイドステップなど) 集団での活動(ボール送り、フラフープくぐり等)
個別の活動 (20分～30分)	バドミントン、卓球(ゴロ卓球含む)、ショートテニス、 スラックライン、ボルダリング、ストラックアウト、 フライングディスク、バスケットボールシュート 等
全員競技 (30分程度)	ふんせんバレー、ならびっこ野球、 大玉ゴロドッジボール 等

表3. 実施回ごとの活動状況

実施回(実施日)	参加人数(男/女)	活動内容(全員競技)
プレ(8月27日)	5名(3名/2名)	ふうせんバレーボール 等
1回目(9月10日)	5名(4名/1名)	体力測定、ふうせんバレーボール 等
2回目(9月24日)	6名(4名/2名)	体力測定、ふうせんバレーボール 等
3回目(10月22日)	9名(7名/2名)	ボール送り、集合ゲーム、 ならびっこ野球 等
4回目(11月12日)	6名(5名/1名)	ボール送り、集合ゲーム、 ならびっこ野球 等
5回目(11月26日)	10名(8名/2名)	ボール送り、フラフープくぐり、 集合ゲーム、ならびっこ野球 等
6回目(12月17日)	6名(5名/1名)	フラフープくぐり、 大玉ゴロドッジボール 等



図1：活動の様子（ウォーミングアップ）



図2：活動の様子（個別の活動／卓球）



図3：活動の様子（全員競技／ならびっこ野球）

5名、女2名)であった。測定項目は文部科学省の新体力テスト<sup>4)</sup>に含まれるものの中から参加者が大きな負担なく取り組めるものとし、握力、反復横とび、立ち幅とび、ハンドボール投げの四項目を選択した。また、測定の実施に際しても練習回数等は厳密に規定せず、参加者の様子を観察しながら無理ない範囲で

実施した。

測定結果を新体力測定実施要項の項目別得点表にあてはめ、該当年代での得点を算出した。その結果、全ての項目においてほとんどの参加者が2点以下であり、握力、反復横とび、ハンドボール投げで3点が1名のみであった。体力測定項目別の得点の状況を表4に

表4. 体力測定項目別の得点の状況

測定項目	得点				
	9～10点	7～8点	5～6点	3～4点	1～2点
握力	0名	0名	0名	1名	6名
反復横とび	0名	0名	0名	1名	4名
立ち幅とび	0名	0名	0名	0名	6名
ハンドボール投げ	0名	0名	0名	1名	6名

示す。ただし、項目によっては測定が困難な者もいたため、項目ごとに人数は異なっている。

### 3. 考察

#### 3-1. 参加者について

わくわく Ads クラブの参加者が保有する療育手帳の区分は A が多く、重度知的障害者の参加が比較的多いと言える。スポーツ・レクリエーションの実施に関する調査<sup>1)</sup>によると、障害者全体において、軽度障害者では半数弱が過去一年間にスポーツやレクリエーションの活動を実施しておらず、更に重度障害者においては六割近くが実施できていないとされている。また、重度の知的障害者では、スポーツやレクリエーションに関心のある者が五割おり、その中でも実際に行っているが不十分と感じている、もしくは関心があるが行えていないと回答した割合が多かったとする調査報告<sup>5)</sup>もある。今回、わくわく Ads クラブの参加者の多くが重度知的障害者であったことは、このような不十分な運動、スポーツ環境に起因し、参加を希望した可能性が考えられる。

参加者の生活習慣を見てみると、睡眠時間は8時間以上確保されており、朝食も全員が毎日必ず摂っているという状況であり、同世代の全国調査<sup>6)7)</sup>と比較しても良好であると考えられる。一方、学校外での運動機会のある

者は半数に満たない。奥住ら<sup>8)</sup>は知的障害特別支援学校卒業後に余暇としてスポーツを行いたいと考えている生徒が少なからずいることを報告している。その意味からも在学中に学校以外での運動やスポーツの場を設け、親しむことは重要であると考えられ、今回わくわく Ads クラブとして、土曜日に運動の機会が提供できたことは意義深いと考えられる。

#### 3-2. 活動について

わくわく Ads クラブは、2016年9月から始まり、2016年12月末現在で、予定プログラムの三分の二程度を終えたところである。活動内容の詳細な検証は行っていない現状であるが、金子と南條<sup>9)</sup>は、知的障害者がスポーツ・レクリエーション活動を実施することは、QOLの向上に寄与する可能性があることを示唆しており、わくわく Ads クラブのような運動・スポーツ活動は重要であると考えられる。また、一方でQOLを高めるためには、参加者のニーズに基づいた活動でなければならないとも指摘している。しかし、わくわく Ads クラブの参加者の多くは重度知的障害者であることを踏まえると、参加者から言語表出として、活動内容を聞き取ることは困難であることが予想される。そのため、活動を積み重ねる中で参加者の行動や表情、保護者からの聞き取りなどを総合的に検討することで、より良い活動内容が検討できるものと思われる。

スポーツが全ての人々の権利であることは、スポーツ基本法の中でも述べられていることであるが、そのために障害の種類や程度に応じた配慮が必要であることも明記されている（スポーツ基本法、第2条第5項）。わくわくAdsクラブの活動内容は基本的にアダプテッド・スポーツの考え方に基いて企画されている。矢部と植木<sup>10)</sup>によれば、「アダプテッド・スポーツとは、障害者や高齢者などの身体能力の低い人を対象としたスポーツ（主体的な身体活動）になる。その理念は、身体能力の低い人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境を問題として取り上げ、両者を統合したシステムづくりこそが大切であるという考え方に基くものである。」とされている。つまり、わくわくAdsクラブを例に考えると、参加者自身と指導者、学生スタッフが相互作用的に関わりあうこと、参加者が理解しやすいルール設定、環境整備、道具の工夫などを総合的に考えていく必要があると言える。その意味からも毎回の実践後に学生スタッフが記録用紙に実践の内容について記述することとした。記述内容は参加者との関わりとその結果、活動に関する疑問点、改善のアイデアなどである。記録内容についてスタッフ間で議論を深めるとともに、保護者や参加者からの聞き取りなども加えながら活動内容を充実させていく必要性があろう。

### 3-3. 体力測定

1回目、ならびに2回目の実践において、参加者の握力、反復横とび、立ち幅とび、ハンドボール投げを測定した。その結果、同年代の測定値と比較してもかなり低い測定値であった。一般的に知的障害者の体力、運動能力は同年代の健常児と比べて低いことが知られているが、安井<sup>11)</sup>は個人差の大きさにも注目すべきであるとし、単純に知的障害児は健常児よりも体力、運動能力が低いと結論づけて終わるのではなく、その背景にある様々な要因が相互的に関連し合った結果であることを理解する必要があると述べている。今回の測定結果についても、参加者の動機づけの高さ、測定ルールの理解の程度など様々な要因の影響があると考えるのは当然であろう。

わくわくAdsクラブの活動目的の一つに「技能や体力の向上」が掲げられているが、それを達成するために運動、スポーツ活動を実施するのではなく、運動やスポーツの持つ本来的な楽しさを重視し、一人ひとりの楽しみとしてスポーツや身体活動に親しみ、継続し、その結果として技能や体力の向上につながるというのが我々の目指すところである。更にQOLの向上や、生涯スポーツの獲得につながれば理想的である。

#### 4. まとめ

大阪体育大学の平成28～32年度、特色あるプロジェクト計画の研究事業の一環として創設された「わくわくAdsクラブ」のこれまでの実践状況について考察を加え、障害児を対象としたスポーツクラブを運営する上での課題を整理し方向性を検討した。その結果、参加者の実態としては、重度知的障害者が多く、学校以外での運動機会も少ないという状況であった。今後の課題として、参加者自身や保護者への聞き取り、実践記録に基づき、参加者が楽しく主体的に参加でき、自身の力を十分に発揮できるような活動内容を検討していく必要があることが示唆された。

#### 参考文献

- 1) 笹川スポーツ財団 (2014) 健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業 (地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究) 報告書.
- 2) 奥田睦子 (2007) 総合型地域スポーツクラブへの障がい者の参加システム構築のための調査研究: 障がい者の参加状況と受け入れ体制の構築に向けたクラブの課題. 金沢大学経済論集, 42, 157-185.
- 3) 藤田紀昭 (2012) 障害者が参加する総合型地域スポーツクラブに関する事例研究. 同志社スポーツ健康科学, 4, 41-50.
- 4) 文部科学省 (1999) 新体力テスト実施要項 (12歳から19歳対象)
- 5) 笹川スポーツ財団 (2016) 地域における障害者スポーツ普及促進事業 (障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究) 報告書.
- 6) 内閣府 (2015) 平成27年版 子ども・若者白書.
- 7) 日本放送協会 (2015) 2015年 国民生活時間調査.
- 8) 奥住秀之・國分充・北島善夫 (2011) 知的障害特別支援学校高等部生徒の現在および卒業後の余暇活動. SNE ジャーナル, 17, 161-173.
- 9) 金子勝司・南條正人 (2007) 知的障害児 (者) のスポーツ・レクリエーション活動と生活の質 (QOL) に関する研究 - 性別による活動群と非活動群からの比較検討 -. 共栄学園短期大学研究紀要, 23, 111-125.
- 10) 矢部京之助・植木章三 (2013) アダプテッド・スポーツについて. 月刊保団連, 1135, 36-42.
- 11) 安井友康 (2004) 知的障害者の身体運動の意義. アダプテッド・スポーツの科学, 市村出版, 160-163.